

小林多喜二の昭和時代，拓銀時代

倉 田 稔

はじめに	47
1 芥川ら，文人	47
2 福本和夫	51
3 文学運動	56
4 大熊信行	60
5 出版祝賀会	62
訂正	66

はじめに

本稿は，小林多喜二伝（20）である。

1 芥川ら，文人

昭和2年，多喜二は銀行の女性同僚の中橋（旧姓）に，今度芥川龍之介が小樽に来て講演するから，聴きに行つてごらんと誘つた。芥川の講演は小樽市の公会堂であり，中橋は聴きに行った⁽¹⁾。

1927年5月20日，改造社から刊行される日本文学全集の宣伝のために全国を文芸講演で回っていた芥川龍之介⁽²⁾と里見弴⁽³⁾は，小樽で講演会を行った。昼の講演会で，芥川はメリヤスシャツの袖口のごれを気にしながら，「着のみ着のままで連れられて来たんですよ。この頭も旭川で刈ったんです。

(1) 佐藤静夫「拓銀時代の多喜二」（『文化評論』1993年3月，No.387，114ページ）。

(2) 芥川（1892－1927）。

(3) 里見（1888－1983）。有島武郎，有島生馬，の弟。

日程がきりつめられているので、からだがとてもつづきません。改造社はけしからんですよ。われわれを人間以下にこきつこうんですからね。でも、食べていかなければならないんですからこれも仕方ありませんね」と言った。聞いていた武田は愕然とした⁽⁴⁾。この二人を招いて、小樽で座談会を開いた。いずれも小林多喜二が中心になって計画、実行した……場所は山田町の新中島⁽⁵⁾で、クラルテの仲間、高商学生、高田紅果もきていた。この歓迎会は、クラルテの連中が世話役であった。参加者は、二四、五名を越えた。妙見河畔の新松島⁽⁶⁾という料亭で行われた。重役タイプの里見が、芸者たちにとり巻かれながら大いに飲み、興のおもむくままに大いに語っていた。一方、芥川は、羽織、袴で、床の間を背にしてきちんと座り、話相手のいない所在なきにひとり悄然としていた。多喜二は、芥川や里見の文学に私淑していなかった。多喜二は里見に、里見のことでなく志賀直哉のことばかりを聞いた。多喜二は志賀を尊敬していた。志賀と親交のある里見に、志賀文学について聞き出そうとした。だが志賀は、里見彦とは、大正5年(1916年)以来絶交中であつた。里見は、迷惑そうな顔も見せないで小林のそのような質問に受け答えをしていた。武田は、エチケットをしらない小林らしい態度を、いつものことなので、ただ眺めていた⁽⁷⁾。

武田暹は言う。「東京から三、四人ほどのいわゆる文化人が小樽にやってきて、われわれと会合をもった時、たまたま、たべものの話がでて、ひとりひとり好きなしゃれた外国などのたべものを披露におよんだ。小林は、とつぜん、おれは白いたきたたてのご飯に塩鮭をこまかくふりかけた、あいつが最高にうまいといったので、みんなはクスクス笑った。傍にいた私の顔も赤くなった。小林はなぜみんなが苦笑したのか、それが通じない男なのである⁽⁸⁾。」

(4) 武田「クラルテ時代」(『小林多喜二読本』新日本出版社1974年)

(5) 料亭の名。すぐ後に新松島と出て来るが、新中島ではないか。

(6) 前注参照。

(7) 武田「クラルテ時代」。

(8) 武田暹(『緑丘』42), 26ページ。

会がおわると、11時の急行で、芥川と里見は小樽駅をたった。小林と武田がプラットフォームに見送った。車が動き出すと、寝台車にはいったきり芥川は姿を見せなかったが、里見はデッキに立って、手をふりながらいつまでも二人に会釈していた。

その芥川は、この少し後、1927年7月24日に自殺した⁽⁹⁾。

北原白秋たちも小樽に来たことがある。

多喜二の親友・片岡亮一は言う。「白秋⁽¹⁰⁾、庄亮のほか、若山牧水⁽¹¹⁾、喜志子⁽¹²⁾夫妻、尾山篤二郎⁽¹³⁾、菊池寛⁽¹⁴⁾など、その当時北海道へ来遊された文筆家は、ほとんど私たちの文芸結社 [=クラルテ] でなにかのお世話をしたので、それらの人々の聲咳に接し、大きな刺激を受けたものであった⁽¹⁵⁾。」と。庄亮とは、吉植庄亮(よしうえ しょうりょう)⁽¹⁶⁾のことであり、北原白秋が大正14年に彼と、樺太北海道旅行をし、小樽にも来た。白秋は片岡の顔をスケッチしたことがある⁽¹⁷⁾。

若山牧水も小樽に来た。片岡は牧水については、こう書く。「大正十五年九月から十一月下旬にかけて、若山牧水夫妻が北海道行脚をした時の、牧水の紀行文には、十一月二十二日に北海道を離れる数日前、札幌の近くで大吹雪にあったと書いている。その直後、私たちは牧水夫妻を小樽の旅宿に訪ねた。手みやげは勿論酒である。……私たちが旅宿に訪ねた日はみぞれが降りしきっていたが、牧水は床の間を背にどっかと座り、すでに盃を手にしていた。

(9) 芥川の死について、宮本顕治、松本清張、江口渙の3人による研究がある。

(10) 北原白秋(1885-1942)、歌人。

(11) 若山牧水(1885-1928)、明治・大正期の歌人。

(12) 若山喜志子(1888-1968)、歌人。牧水の妻。

(13) 尾山(1889-1963)、歌人。

(14) 菊池寛(1888-1948)、普通は、かん、と呼ばれる。しかし正しくは、ひろし。大正・昭和期の小説家・戯曲家。流行作家になった。

(15) 片岡『雪田』137ページ。

(16) 吉植(1884-1958)、大正・昭和の歌人。その後、政治家。

(17) それは、『雪田』(131ページ)にある。

その時の着ぶくれて首にまいた襟巻が印象的であった⁽¹⁸⁾。」

菊池寛については、こうである。「大正15年7月 菊池寛が北海道に来た時、小樽の私たちグループで文芸講演会を催した。開場の控室に入ってきた菊池寛は、机の上にカンカン帽を置いた。そして慇懃なまでに頭を下げて私たちに挨拶した途端に、机上のカンカン帽に額をぶっつけた。それまで少し堅くなっていた私たちは、目の前に現れた菊池寛の例の風貌とともに、この一場面をみてすっかり気が楽になった……」小島政二郎の『明治の人間』によると、菊池寛の講演は、「話し方にリズムがあって、退屈するスキを与えず」「平談俗語、まるで応接室で菊池さんをかこんで話を聞いているよう」「がったり、ぶったりしたところがこれっぽっちなく」、しかも一言一句が生きるので、必ず人を感動させたという。「小樽での講演もたしかにそういう趣のものであったように思う。その講演内容は、小林多喜二がまとめてくれて、私たちの同人雑誌に掲載したが、内容は戯曲と小説の区別について述べられたものであった。今それを読みかえしてみると、講演の内容もさることながら、多喜二の要点の掴み方のうまいのにも感心させられる。その講演の中で菊池寛は戯曲の一要素として、アリストテレスの「真（ほ）んとうらしい虚（うそ）が、虚（うそ）らしい真（ほ）んとうよりはいい」という言葉を挙げて説いている……⁽¹⁹⁾」

多喜二と田口タキとのこと⁽²⁰⁾は、前出の銀行の女性同僚・中橋は、当時全く知らなかった。銀行のなかでも、誰も話にもなっていなかった。多分、そういう個人的なことは多喜二は喋らなかった。中橋は、昭和2年夏に辞めた。その3月や6月に、多喜二が磯野の小作争議に協力したり、小樽の港湾争議を応援したが、それは中橋は知らなかった。中橋は辞めるとき、その後へ従

(18) 同、150-151 ページ。

(19) 同、155-154 ページ。

(20) 拙稿「小林多喜二の恋」（『人文研究』90 しゅう）参照。

妹の吉田（旧姓）みよを，給仕として世話をした。その従妹がこう言った。

多喜二が昭和3年に，為替係から調査係へかえられた。調査係はどちらかという暇のある係だが，多喜二が休み時間に、『改造』か『中央公論』かを読んでいたら，それを見て支店長が，その雑誌を手でパツとはたきおとした。——滝支店長ではなく，その後任の支店長である。——この年の3月15日には[多喜二の]身近な人が検挙されているし，銀行の中でも，[多喜二は]上の人にはにらまれていたのではないか。多喜二は，昭和4年の9月には調査係から出納係へ移されて，11月に解雇されることになる⁽²¹⁾。

2 福本和夫

日本共産党の合法機関誌といわれる雑誌『マルクス主義』に，1924（大正3）年，福本和夫の論文が載った。それまで日本共産党の指導理論であった山川均（1880-1958）の理論を批判したものである。福本は，前衛分子の結集こそ当面の課題であるとし，理論闘争による分離・結合を説いた。彼の考えは福本イズムと呼ばれる。これは1926（大正14）年から台頭した。そして彼は1926年12月，日本共産党第3回大会（山形県五色温泉）つまり党再建大会で，中心的に活躍した。

福本和夫は，1894（明治27）年に，鳥取県に生まれた。東大法学部政治学科を卒業し，松江高校教授になり，1922年から2年半，文部省在外研究員として，ドイツ・フランス・イギリスに留学した。そしてカール・コルシュらに学んだ。

コルシュ（Karl Korsch, 1886-1961.）⁽²²⁾は，USPD（ドイツ独立社会民主

(21) 前出『文化評論』115ページ。

(22) コルシュは，ドイツの，ハンブルクで生まれた。1911年，イェナ大学で法律学の学位をとる。イギリスに留学し，フェビアン協会に加入した。第1次大戦末にマルクス主義に近づき，スパルタクス派に近づく。1919年，社会化委員会に参加し，*Was ist Sozialisierung*, 1919. を書いた。主著 *Marxismus und Philosophie*, 1923. 他に，*Die materialistische Geschichtsauffassung*, 1929.; *Karl Marx*, 1950.

党)の⁽²³⁾ 党员で、その後、KPD(ドイツ共産党)に入党した。チューリッゲン州のSPD(ドイツ社会民主党)とKPDの連立政権で法相になった。またイェナ大学の法学部教授となった。1926年、直接民主主義の考え方から、KPDを除名された。

日本では、コルシュは、福本が学んだ師として有名である。コルシュは、逸脱した左翼主義として見られた。しかし、KPDを除名されたのは、ソ連の硬直的指導のせいでもある。福本がコルシュに教わったのは、コルシュがイェナ大学教授であった時代らしい。

福本は、マルクス・レーニン主義者として、1924年に帰国した。帰国後、小樽と山口の高商で口が空いていて、山口高商教授になった。そこで商法を教えた。ここで、福本が小樽高商に就職したならば、非常に面白い話になっていたことであろう。

雑誌『マルクス主義』に、1924(大正13)年、福本の論文がほとんど毎号載った。この雑誌は、西雅雄(1896-1944)が編集の一切をしていて、日本共産党の、正確にはコミュニスト・グループの合法機関誌といわれる。このグループは、解党した共産党の残存グループあるいは、再建グループのことである。

福本の論文は、マルクスやレーニンの原典、と言ってもドイツ語からの引用、で飾られ、当時の日本の運動家がほとんど知らない文献で溢れていた。福本の理論水準には誰も太刀打ちできなかった。それまで日本共産党の指導理論であった山川均を批判し、前衛分子の結集こそ当面の課題であるとし、理論闘争による分離・結合を説いた。彼の考えは、福本イズムと呼ばれる。彼の説く「分離・結合」論、理論闘争という用語は、左翼に流行を起こした。

がある。日本では余りコルシュの研究はないが、スターリン主義による歪曲のせいも大きい。

(23) この時期の同党について、拙稿「USPDとヒルファディング外伝、1918年まで」(『商学討究』48巻1号)参照。

こうして1926年から福本イズムが台頭した。

1926年12月、日本共産党第3回大会（山形県五色温泉）つまり党再建大会で福本は中心的に活躍する⁽²⁴⁾。彼は同党政治部長になった。

福本の『経済学批判の方法論』（東京 白揚社 大正15年）は、3篇からなる。第1篇は、書名と同じで、副題を「マルクス主義経済学の方法論」とする。最後に、福田徳三、河上肇、小泉信三、高田保馬を批判する。第2篇は、3つの論文からなり、『資本論』をめぐる議論である。第3篇は、経済史の研究方法、であり、唯物史観の問題を取り扱う。1926年4月脱稿の、439ページにわたる大著である。

彼の主著『社会の構成並にその変革の過程』は、左翼的学生の間にバイブルのようにもて囃された。一種独特の用語がことさら魅了した。例えば、「いまや日本資本主義は急速に没落の過程を過程しつつある」とか、「我国全無産階級運動は、今やその方向を転換せねばならぬ」などである。

1927（昭和2）年に福本主義などの問題がコミンテルン（国際共産党）に持ち込まれ、そのための会議がモスクワで開かれた。1927（昭和2）年、コミンテルンに呼ばれて、2月から10月まで、福本、佐野文夫、渡辺政之輔、徳田球一らは、日本を脱出し、モスクワへ行った。そこに片山潜が参加し、渡辺政之輔、佐野文夫、福本和夫、徳田球一、河合悦三らによって、日本問題特別委員会が組織され、徹底的な討論が行われた。その結果、7月に「日本問題に関する決議」（二七年テーゼ）が出た。

コミンテルンは、いわゆる「二七年テーゼ」を発表した。彼らの帰国後だった。その内容の1つは、福本理論による日本共産党の方針の批判であった。執筆はブハーリンである。ここで、山川イズムとともに、福本イズムが批判されたとされる。だが「二七年テーゼ」は、特に文言としては山川主義を批判していないで、福本主義を批判していた。福本のインテリゲンチア過大評

(24) 下里『日本の暗黒』1，新日本出版社。

価、労働者大衆からの遊離、セクト主義が批判された。

モスクワでは福本自身も誤りを認め、日本共産党の中央委員を辞任することになった。この批判以降、福本理論は指導性を失っていった。福本がコミンテルンで批判され、すぐ批判を受け入れたのは、よほどコミンテルンを信仰していたのか、恐ろしかったか、である。コミンテルンで福本主義が否定されて、日本では一気に福本イズムが力を失った。

この当時の真面目な党員が、福本主義を捨てた当時を思い出している。佐野英彦の思い出である。

「この『テーゼ』[二七年テーゼ]を読んで、私 [=佐野] は強く印象づけられ、激しく心をゆすぶられた。それと同時に、これとは反対に嫌な思い出もつきまとった。……あれほど理論的に世界の水準をこえていると評価されていた「福本主義」が、木端微塵に批判され、あと型もなくかえりみられなくなってしまったことであった。……何んにも知らないわたしに、福本の著作を金科玉条のように推賞した先輩も、また私自身も、「福本主義」をすぐれていると思っていたのに、今度は「福本主義」をどうやって頭脳の中から「揚棄⁽²⁵⁾」しようかと一八〇度の転換をしはじめた。批判を受けたら、その批判を本当に納得して、その納得の上に立って誤っていた「理論」を止揚するのが学問の道であろうのに、はたして私たちはそうしただろうか。先輩諸兄はどうしたか知らないけれど、わたしは今まで座右銘のようにあついていた福本の諸著を、あたかも汚物をあつかうかのように本棚の片隅におしやり、見ることを拒否する気持ちでかたづけた⁽²⁶⁾。」

これは、キリスト教会が異端と決めた書を信者が見る態度と、ちょうど同じである。公式の共産党史によれば、こうである。

「第3回党大会で党が再建されたことは、日本人民の解放闘争に大きな意義

(25) 揚棄は、Aufheben の福本による訳語で、有名な語である。その後、止揚へと、言葉が代わった。

(26) 佐野英彦『遠い道』1981年 127ページ。

をもった。しかし、大会で決定された政治方針には、重大な誤りがふくまれていた。それは、第一次検挙による刑が確定し、党の指導者の多くが下獄した時期に、党中央にくわった福本和夫の観念的な、科学的社会主義の立場からいちじるしく逸脱したこの理論が党にもちこまれた結果、おこったものであった。

いわゆる「福本主義」は、天皇制のきびしい弾圧をおそれて共産党の合法的無産政党への解消を主張する山川均らの解党主義——いわゆる「山川主義」を克服するたたかいと関連して、党内にもちこまれた。福本は、レーニンの「なにをなすべきか」などを典拠としながら、その党建設の理論を観念的にわい曲し、「理論闘争」によって「真のマルクス主義意識」を獲得し組合主義や折衷主義の意識から「分離」することこそ、前衛党の建設だと主張した。これは、党建設の仕事を実際の革命運動からはなれた「意識」だけの問題にすりかえ、勤労大衆、とくに労働者階級と強固にむすびついた大衆の前衛党の建設を否定することであった。また福本は、「理論闘争」や「分離結合」論を大衆運動や大衆団体にもおしつけ、総同盟その他、右派勢力によってひきおこされた各分野の戦線の分裂を、無産階級運動の必然的な発展過程として合理化しただけでなく、前衛党と大衆団体の任務を混同して、労働農民党や評議会などに、前衛党のはたすべき任務をになわせることを主張した⁽²⁷⁾。

荒畑寒村は云う。福本主義は、レーニンの『何をなすべきか』の「焼き直し」だ。「結合の前の分離」は、それだけではむしろ当然のことなのだが、日本の場合、間違っていたのは、革命政党の組織的原則論を大衆団体にあてはめた結果、分裂主義が共産党の方針として是認され、実行されたことにあった……と⁽²⁸⁾。これは分かりやすい。ただし、「日本の場合」の一句は余計だろう。また、福本主義に対する興味深い指摘は、立花隆が書いている⁽²⁹⁾。

(27) 『日本共産党の歴史』52-53 ページ。

(28) 『昭和史探訪』1, 168-9 ページ。

(29) 『日本共産党の研究 上』文芸春秋 昭和53年、第2章・第3章。

福本は、三・一五事件直後、捕まり入獄した。非転向のまま在獄14年であった⁽³⁰⁾。

多喜二は、福本の有名な書『社会の構成並びにその変革の過程』を二度も読んでいる。島田と多喜二が毎日通る花園町に、丸文と左文字という書店があって、帰りには、たいがい寄って見た。「女囚徒」の話が一段落すると、今度は多喜二は、福本和夫の「マルクス主義の為に」を買って読んでいた。そして有名な「何処も否」というような文章を話した。多喜二は、「中々面倒だ」と言った。

それはそうである。福本の書物や文はとてもむずかしくて、読んだ人で、気が違った人がいるくらいであった。

3 文学運動

1925(大正14)年12月に、日本プロレタリア文芸連盟が創立した。これは、アナキストらもふくめた共同戦線であった。翌1926年12月に、日本プロレタリア芸術連盟に改組・改称され、マルクス主義で統一された。それが、福本主義の影響で、7月に二派に分裂した。一方は、文化運動を機械的に政治闘争に統合しようとし、機関誌『プロレタリア芸術』をもつプロレタリア芸術

(30) 福本の著書・など；「中野重治と僕」『日本文学全集』「中野重治集」月報。
『福本和夫初期著作集』こぶし書房。
『日本ルネッサンス史論』東西書房。
『自主性・人間性の回復を目指して四五年』教友社。
『革命運動裸像・非合法時代の思い出』三一書房。
『経済学批判の方法論』東京 白揚社 大正15年。
『社会の構成＝並に変革の過程』白揚社 大正15年 定価2円。
『唯物史観のために』改造社 昭和3年。
『唯物史観と中間派史観』昭和2年。
『日本の山林地主』昭和27年。
『新・旧山林大地主の実態』昭和30年。
(ペン・ネーム北条一雄)『方向転換論』。
研究；『昭和思想集 1』(日本思想体系)筑摩書房。
『昭和史探訪 1』角川文庫 1988年 5版。

連盟（プロ芸）と、他方は、文化芸術運動の特殊性をまもろうとし、機関誌『文芸戦線（文戦）』をもつ労農芸術家連盟（労芸）であった。

『文芸戦線』1927年10月に、多喜二の「女囚徒」が載った。1927年8月、『文芸戦線』の読者であった多喜二は、後者の、労農芸術家同盟に入った。その機関誌は「文芸戦線」であった。土井は、言う。「女囚徒」が『文芸戦線』にのることになった。その作の投稿がきっかけとなって、[多喜二は]労農芸術家連盟に加入した⁽³¹⁾。多喜二は文芸戦線読書会を催し、左翼文芸研究会を組織した。多喜二は、文戦の読者を組織・拡大しながら、プロ芸との合同研究会などもひらいた。

だが1927年（昭和2年）には、文芸戦線を中心とした作家たちが分裂し始める。労芸の中に、山川イズムの社会民主主義思想を受け入れようとする人々と、これに追随しない人々との対立が生まれた。一一月、後者はあらたに前衛芸術家同盟（前芸）をつくり、『前衛』を創刊した。多喜二は労芸を脱退し、前芸に参加した。

分裂は、主に次の3つに、である。1つは、労農芸術家連盟（前田河広一郎⁽³²⁾、金子洋文⁽³³⁾、小堀、葉山嘉樹⁽³⁴⁾、里村欣三⁽³⁵⁾、青野季吉⁽³⁶⁾ら）であり、略して、労芸である。2つは、日本プロレタリア芸術連盟であり、3つは、前衛芸術家同盟であった。1は、文芸戦線の主流派であった。この分裂は、福本和夫の影響のためだった。福本イズムの台頭は1926年からだった。

だが福本イズムが没落し、新しく統一の機運ができた。日本プロレタリア芸術連盟は、前衛芸術家同盟を支持した。1928年3月に文学運動が統一された。1928年の3月13日に「日本左翼文芸家総連合」ができた。そこに50人

(31) 土井大助『小林多喜二』汐文社 1979年、36ページ。

(32) まえだこう・ひろいちろう（1888-1957）。

(33) かねこ・ようぶん（1894-1985）。

(34) はやま・よしき（1894-1945）。

(35)（1902-45）。

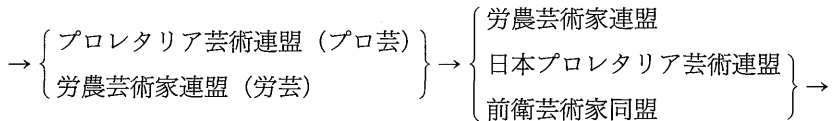
(36) あおの・すえきち（1890-1961）。

余が集まった。大宅壮一（1900-70）、小川未明（1882-1961）、橋爪健、山田清三郎（1896-1987）、川口浩、本庄陸男（りくお、1905-39）、蔵原惟人（1902-91）、窪川鶴次郎、壺井繁治（1898-1975）、江口渙（かん、と言われるが、正しくは、きよし、1887-1975）、武田麟太郎（1904-46）らである。ただし労農芸術家連盟からは参加がなかった。これが、全日本無産者芸術連盟（ナップ）結成の地ならしになる。

この2日後、三・一五事件がやってくる。これにショックを受けた人々は、日本プロレタリア芸術連盟と前衛芸術家同盟とを合同させることにした。1928年3月26日、全日本無産者芸術連盟（ナップ）が成立した。文芸戦線に集まっている労農芸術家連盟（労芸）は、ナップに対立しつづけていた。ナップは機関誌として『戦旗』を出した。

参考図

日本プロレタリア文芸連盟→日本プロレタリア芸術連盟→



→日本左翼文芸家総連合→全日本無産者芸術連盟（ナップ）→

全日本無産者芸術団体協議会（ナップ）

同じ1928年12月25日に、ナップは、組織替えの大会を持った。文学、美術、演劇など、専門部別に組織を作って、その上に統一組織としての協議会を置いた。そして名前を、全日本無産者芸術団体協議会（ナップ）とした。文学では、日本プロレタリア作家同盟が結成された。1929年2月10日の創立大会で、組織ができた。中央委員長 藤森成吉（1892-1977）、書記長 猪野省三（1905-）、中央委員 林房雄（1903-75）、山田清三郎（1896-1987）、中野重治（1902-79）、鹿地亘、蔵原、江馬修（正しくは、ながし、1889-1975）、壺井繁治（1898-1975）、江口渙、（以上常任）、小林多喜二、久坂栄二郎。同

盟員数は80名だった。多喜二が中央委員になったのは、『一九二八年三月十五日』のお蔭である。

米山勝見⁽³⁷⁾多喜二の友人で、小樽新聞記者——は、いろいろなものを読んだ。そして「これがいい、小林、これを読め」と盛んにやった。勝見は言う。多喜二は「非常にまじめな人でね。こっちが冷やかしても本気になる人だった。」勝見は、たまたま本屋に1冊しか入らなかつたリベジンスキーの池谷信三郎訳の『一週間』を買った。「これは人間を書いたのではない、事件そのものを書いたのだ、——こういうわけですよ。」そのころはプロレタリア文学運動も盛んになって来た時分で、「君、こういうのが本当のプロレタリア文学じゃないか、と、えらそうに一席ぶつたら、貸してくれと言って[多喜二は]持って行った。」「三・一五事件を書いた小説の形式、やはり『一週間』が決定したんじゃないか、『蟹工船』も……⁽³⁸⁾」

武田は、多喜二から小林流の読後感も聞いた。そして、たしかにリベジンスキーからの影響がある、と言う。

ただし、多喜二は、葉山の『セメント樽のなかの手紙』とか『淫売婦』、リベジンスキーなどの話を島田と喋る時、勝見の名前は出て来なかつた。「島田さん、これ読んだほうがいい」というわけだった。「『一週間』は、これは主人公のない小説だ、素晴らしいんだ」と、多喜二は島田に言っていた。

だいたい多喜二は、読むのは後手だった。武田や勝見が先走りだった。「それを本物にするかしないか、自分の肉とし骨とするかについては、ぼくらの及ばない小林の偉さがあつた……」と武田は言う。

勝見も言う。「ほんとにそうだね。吸収してね。つまらないことを我々が言っ

(37) 拙稿「大正時代の小林多喜二の評論と彼の思想」(『商学討究』46巻 4号)も参照。

(38) 『北方文芸』1968年3月。

(39) 『北方文芸』1968年3月。

でも、そうっかかって考えてましたからね。まじめな人だった。」島田も言う、「無色透明という感じだね。そこへピューッと吸収してしまう⁽³⁹⁾。」

4 大熊信行

多喜二のかつての恩師・大熊信行の処女作は、『社会思想家としてのラスキンとモリス』新潮社（昭和2年）だった。これは、大熊が小樽を去ってから出版したものである。そして、4つの部分と付録からなっていた。ラスキン⁽⁴⁰⁾とモリス⁽⁴¹⁾の研究である。

これが出版されると、時を移さず、多喜二は、大熊となんの相談もなしに、「大熊信行先生の“社会思想家としてのラスキンとモリス”という賛美の一文を、『小樽新聞』の昭和2年2月27日号に草し、おまけに広告欄に、新刊書として同書の堂々たる広告を凸版入りで掲載した。」大熊は、「それがおなじ新聞であったか、高商の学校新聞であったかは思いだせないけれども、」と言うが、同じく大熊の『文学的回想』の222ページでは、小樽新聞だと言う。「とにかく思ったことを一存でやってしまう多喜二の気質のあらわれである。

広告料の支払いなど、どう処理したかわからないが、広告文が多喜二の作であることは明らかであった⁽⁴²⁾。」

戦前のモリス受容について、小野二郎は書く。「モリス・プロパーの研究書も2冊刊行され、翻訳も数多く出版された。しかしこの時期が目されるのは、その量的盛行のゆえではない。たとえば、大熊信行著『社会思想家としてのラスキンとモリス』（1927年）は、『近世画家』としてのラスキンをよく見ておらず、『地上の楽園』の作者としてのモリスはすこしも知らない一面的研究と自ら断わりながら、モリスの「きわめて滋味深い」「美術のまた社会主

(40) ラスキン John Ruskin, 1819-1900. ロンドン生まれ、オクスフォード大学卒業。美術批評家。社会改革論者。

(41) モリス William Morris, 1834-96. 詩人、工芸家、社会主義運動家。

(42) 大熊『文学的回想』215ページ。

義体系に包摂さるべき理由を有するとする理論」を「労働理論」を中心に据えて透徹詳細に分析したことによって、かえってモリスの全体像を照射しえた。この「労働理論」への着眼は、この時期の最大最高の成果であって、その功は若き日の大熊氏に帰せられる。(第1論文の初出は1921年である。)この視点は、そのまま今日のわれわれの共有せねばならぬものであり、世界的にいっても同時代における最も尖鋭な切込みであったのである⁽⁴³⁾。

この書の別の批評は、『東京朝日新聞』昭和2年5月5日、柳宗悦(やなぎむねよし)の「ラスキンとモリス」によっても、なされた⁽⁴⁴⁾。

佐々木妙二が、秋田師範の教員をしている時に、「まるめら」が出た。その翌年だかに、大熊信行から「入らないか。」と言われて、佐々木は「まるめら」同人に入った。[佐々木の卒業以来]それまで格別のつきあいはなかった。「まるめら」の同人といっても、実際に同人がみんな集まったことはあまりない。横の連絡がない。同人といっても、ほとんど大熊のワンマンだった。発行部数は二百くらいだった。昭和16年に休刊した。最大の理由は、大熊自身の事情と当時の社会情勢の中での考慮だろうと、佐々木は推測する⁽⁴⁵⁾。佐々木は「まるめら」をやっているころから「プロレタリア短歌」に入っていた⁽⁴⁶⁾。

土田秀雄は、小樽高商を卒業し、数年後、東京商大へ入り、大塚金之助のゼミナールに入った。土田は言う。「僕には作歌について師事した人が居ない。」むしろゼミナールの指導教授であった大塚金之助先生からいろいろな意味で深い影響をうけたと思う。先生はその頃アラゴの同人ではあったが、

(43) 小野二郎『ウィリアム・モリス』中公文庫 1992年 19-20ページ

(44) モリスについて、『ウィリアム・モリス 全仕事』が最近出た。

(45) 佐々木妙二『「まるめら」の主宰者』(『大熊信行研究』第参号、1980年10月20日) 3-4ページ。

(46) 作家・井上ひさし氏は、幼少のころ、大熊の膝の上に乗ったと語る(同氏講話、小樽商大にて、1997年2月)。

子規以来の写生道には批判的な立場を抱かれ、その作品は思想的な鋭さをもつ、孤独な歌風で、むしろ啄木の歌に通ずるものがあった。先生は学問の指導はしたが作歌に就いては決して指導はされなかった。大学の歌会にも殆んど顔を出されなかった。中野の僕の下宿に大熊信行先生が暫く仮寓された時、大塚先生は東中野に住んで居ったので、自然行き来があり両先生の間に歌の話も出るようになった。その後浦野敬氏などを交えて「まるめら」のアラビギ批判が始まるのだが、先生は殆んどかかれなかった。「まるめら」を賑わしたのは大熊信行先生の数々の歌論であり、一連の短歌型態革新運動であった。赤倉の旅館で浦野氏と二人で「まるめら」の編集をした……⁽⁴⁷⁾。

1974年、映画『小林多喜二』ができあがったときに、読売ホールの試写会に、大熊信行は招かれ、会場に向いたにもかかわらず、映画の始まる直前に帰ってしまった。知人にこう語った。老齢になって「いっそう涙もろくなり、号泣しそうだから」。スチール写真の多喜二役の俳優については、さっぱりしていて適役のようだ、と⁽⁴⁸⁾。

5 出版祝賀会

1927年3月、多喜二は恋人・田口瀧子あての手紙で、「此頃カール・マルクスという近世科学的社会主義者の『資本論』を読んでいる⁽⁴⁹⁾。」と書き送っている。多喜二は、もともと『資本論』を読みたいと思っていただろうが、『小樽新聞』での論争⁽⁵⁰⁾で、どうしても読まざるをえない。

庁商時代の友人石本氏は、ときどき築港の多喜二の家に遊びにいった。多喜二も石本氏の家へ遊びにきた。拓銀に入ってから何年かの間、多喜二が遊

(47) 土田『歌集 氷原』十字屋書店 昭和28年115-6ページ。

(48) 榊原手紙、1994年。

(49) 『小林多喜二全集』新日本出版社 第7巻、347ページ。

(50) 拙稿「大正時代の小林多喜二の評論と彼の思想」前出、参照。

びにくると、よく、石本氏の母が用意した肉鍋をつつきながら漫談をし、女の話をし、文学の話をした。そのころはもうかなり小説を書いていた。また経済学の話、マルクス・レーニン論、労働問題を話した。石本氏は、彼と経済論を闘わしたりし、時々こう話したりした。

「君、あんまりマルクスだとか、資本論だとかに凝らずに、他にまだたくさん経済学の博士もいるし、角度の違う経済学も研究する必要もあるのではないか、それにこのごろ馬鹿に特高が厳しくなってきたではないか。」

石本氏は、他の経済学博士として、福田徳三を挙げた。多喜二はそれを、「うん、うん」と聞いていた⁽⁵¹⁾。

昭和2年の晩秋のことであった。当時「小樽新聞」の記者をしていた、米山勝美（小樽中学卒、早稲田大学出身、後に奈良と改姓、後に北海道新聞社の重役になる）が、カア・ソングースの“Population”を翻訳し、北吟吉・高畠素之の編纂の新学説大系の一冊として「人口問題の研究」（新潮社、昭和二年一一月）という書名で出版した。

この出版祝賀会が、——南によると——千代田ビルの一室で行われた。

米山は、中学の後輩である武田暹に、その祝賀会に小林君を誘って出席するように言った。武田は、小林をつれていくことに一種のためらいをもった。というのは、その「人口問題研究」が少なくともマルキシズムに立脚した学説でないことは、その方面にうとい武田でも察知できた。それに、相手方や場所をわきまえないで、齒に衣を着せずに自分の所論をまくしたてる小林の気性をいやというほど知っていたからである。しかし、そのような理由でことわることもできないままに、武田は多喜二を誘って一緒にでかけた。

場所は、公園通りの四つ角にあったたかはしピヤホールだったと、武田は書く——南と違っている——。参加者は三〇名ほどであった。司会者の挨拶が

(51) 石本、およびインタビュー。

なされた。

その席上で司会者に指名されて南亮三郎がスピーチをした。

南は、マルクス学説にも言及して、人口問題は社会主義社会でも避けられない旨を述べ、そのように重大な問題の参考文献としてカー・ソングースの訳本が出たことに祝意を表した。

ところが、南の祝賀スピーチが終わって着席するや否や、席の横の方から1人の青年が立って、言葉はげしく南のスピーチを反駁しだした。これは上気したように顔をあからめた背広姿の多喜二であった。小林の反論は、南によるところであった。

「人口問題は資本主義社会に矛盾の一発露にほかならず、その秘密をえぐり出したマルクス主義の学説は、人口問題の永久の解決方向を示している。」

その態度にはすこしも仮借をゆるさない鋭さと不敵さがあらわれていた。思いがけない論敵の出現で、南は瞬時、どきんとした。祝賀会の席がたちまち火花の発する論議の場所になった。南は「困ったな」とおもった。だが若い人口論学者の南としてはここで黙っているわけにゆかなかった。彼は再度立ってこれに応酬した。

「『資本論』に書かれたマルクスの学説は資本主義社会の人口問題を説きつくしたものではない。マルクス主義の体系には、実は人口の理論は欠けているのだ。その証拠に、マルクス主義者として生涯をはじめながら人口理論のブランクを認めて自らこれを埋めようとしたカウツキーの青年時代の書き物のことを指摘したり、カール・マルロオという社会主義人口理論家のことを例証にあげたりして、マルクス主義はまだ決してマルサスの人口理論を全面的にくつがえしてはいないのだ。」

南のこの例証による答弁で、小林は再度発言するのを封じられた。小林はなんにも言わなかった。しかし祝賀どころか、気まずい空気の中で幕となった。小林は仲間の若いグループにかこまれて、席を蹴るようにして出て行った。

南もまもなくそこを出た。だがすぐ家に向かって帰らなかった。南はその

日までマルクス主義には相当に理解をもっていると信じていた。しかしこうして多喜二から強い反発を受けてみると，自分の周囲にはいつの間にか思いがけない大きな溝が堀りあげられて，どこからも手の届かない完全な孤独に投げ込まれたような気持ちを味わった。

多喜二は，相手方や場所をわきまえないで，齒にきぬ着せずに自分の所論をまくしたてる気性であった。

後年，南はあの会合のあとのことを聞かされた。

小林は気負いこんで南の所論を反駁したものの，かれの知らない豊富な研究の例証でその反駁をたたかれて後が続かず，非常にくやしがった，と。

多喜二と武田は，その祝賀会場であるピアホールを出た。玄関を出た途端，せきを切ったように，多喜二が，わっと，大きな声で空にむかって泣き出したのである。まさに号泣だった。外はまだ宵のうちで人通りがあった。二人はにぎやかな町とは反対の公園の方へ雪解けの路を歩いていった。いつか，激しい号泣は嗚咽となったが，じーんと胸にせまってくるものを抑え切れずに武田も泣けそうになり，おもわずマントを小林の頭からかぶせた。そして「もっと泣け，うんと泣くんだ」といった。小林はからだを武田にまかせながら，「畜生，敗けるもんか，いまに見てろ」と，マントの中でさげんだ。公園の坂を登って，二人は右に折れた。嗚咽はつづいた。二人は，そのころ武田の宿舎だった小樽市立図書館の石段を，一つの塊となって踏んだ。（武田）

武田はこう書いている。

「あの時，小林はなぜあんなに泣いたんだろう。月並みに解釈すれば，南教授との論戦に敗れたくやし涙ともとれる。祝賀会をめちゃめちゃにした恥ずかしさの涙であったかもしれぬ。しかし，小林はあの時，もっと強くなれ，信ずる道をまっすぐに突きすすむんだ，と自分自身への誓いを涙で誓ったの

(52) 武田「クラルテ時代」（『小林多喜二読本』新日本出版社1974年）；南亮三郎「小林多喜二と人口論」（『緑丘』42）。

だと思ふのである。私はあの時、一塊の火の玉となって燃えあがろうとする小林を肌を感じとったからである⁽⁵²⁾。」

マルサスの人口論は、抽象的にしか正しくなく、人口法則は、歴史的社會構成体によってそれぞれ違ふのである。実際は、正しくないと見なせる⁽⁵³⁾。この武田の話から分かるのだが、南も多喜二も、マルクス主義的なマルサス批判をよく理解していなかつた。もつともそれは、当時のマルクス研究の水準にかかわるものであるから、しかたない。

訂正

前稿「昭和の初めの小林多喜二」（『人文研究』第93輯1997年3月）で、間違いがあつた。「加川先生によると、この入船公園は、さむらい部落の人々によって作られた。」（72ページ）とあるが、私の聞き間違いであつた。先ずは加川先生にお詫びし、かつ、訂正したい。加川先生は、「入船公園は、さむらい部落のあつたところに作られた」と語つたことはある、と書く（1997.4.26手紙）。なお、入船公園がタコ部屋によって作られた（同、71-72ページ）、というのも、正しくなさそうである。

(53) マルサスは、『人口論』の中で、一世代で人口が倍加すると言う。だがこれは、当時のアメリカの例である。それに、このマルサス人口論は産児制限を知らない時代の理論である。また、一国の人口が減ることもありうる。國民大衆の生活資料は、独得の水準によって決まる。すなわち、國民大衆が作り上げた一国の富と、彼らが消費できる量とは違ふ。後者は前者の1部分である。例えば、現在では後者は前者のほぼ半分である。その水準は、時代によって社會構成によって、違ふ。ただし、國民大衆の人口と彼らが消費できるその独得の量との關係の狭い領域では、マルサス理論はかなり正しくなる。